

復帰50年特別番組

ぬち 命 ぬみ 水

～映し出された沖縄の50年～



ピーファス

45万人の飲料水に有害物質が混入した。有機フッ素化合物PFAS。汚染源をたどると、米軍基地の存在が一。

ディレクター：ジョン・ミッチェル、島袋夏子 撮影編集：又吉 謙 制作著作：QAB 琉球朝日放送

上映会＋トークイベント

ドキュメンタリー作品

命ぬ水

2023年5月15日（月）18時～20時（17時半開場）

会場：東京工業大学 西9号館E棟2階
デジタル多目的ホール

対象：東工大学内者および学外者（一般公開イベント）
参加費：無料（事前申込が必要です）
参加申込は右のQRコード or 下のURLから

<https://forms.gle/ywVpWViyS7sNhy3CA>

※イベントには学内外から、どなたでもご参加いただけます



を知っていますか？

PFAS

日本のもうひとつの公害問題



本土復帰から50年の節目を迎えた沖縄で、新たに持ち上がったアメリカ軍基地問題がある。

アメリカ軍が使っている「泡消火剤」に含まれる有害物質・PFAS(ピーファス)による水源汚染だ。PFASは焦げつかないフライパンやファストフードの包み紙、じゅうたん、衣類などに多用されてきた。

しかし環境中で分解されにくく、一度体内に取り込まれると長く蓄積されてしまうため「永遠の化学物質」と呼ばれ、有害性が指摘されている。ヨーロッパ環境庁(EEA)は健康影響として、腎臓がん、精巣がん、肝障害、甲状腺疾患、コレステロール値の増加、低出生体重児、ワクチン接種効果の低減、乳腺の発達遅延などをあげている。

当初、影響を受けているとみられたのは嘉手納基地周辺の7市町村、45万人。ところが沖縄県などの調査で、宜野湾市の普天間基地や金武町のキャンプ・ハンセン周辺の川や地下水でも次々に汚染が発覚している。

沖縄戦で住民の4人に1人が犠牲になり、戦後も27年間、日本本土と切り離され、米国統治下を経験した沖縄。戦世(いくさゆー)からアメリカ世(あめりかゆー)、そして大和世(やまとゆー)へと時代が移り変わる中、貧しく、苦しい生活を支え、人々の命をつないできたのは、地中からわき出す「命ぬ水(ぬちぬみじ)」だった。

ディレクターには、これまで数々の米軍基地問題をスクープし、昨年、米国の「レイチル・カーソン環境出版賞」で2位を受賞したフリージャーナリストのジョン・ミッチェル氏が参加。米情報自由法(FOIA)を利用して得た米軍や米連邦議会資料、内部告発者から手に入れた映像や写真などから問題の本質に迫った。

<https://www.qab.co.jp/sp/nuchinumiji/>より転載



島袋夏子

琉球朝日放送記者
沖縄における基地問題や枯葉剤の残留問題について長年調査し、作品を手がけている。2014年にギャラクシー賞番組部門大賞、2016年に日本民間放送連盟賞テレビ報道部門最優秀賞受賞



ジョン・ミッチェル

フリージャーナリスト
明治学院大学国際平和研究所研究員
東京工業大学 講師
著書に『追跡・沖縄の枯葉剤』『永遠の化学物質 水のPFAS汚染』など。
FCCJ 報道の自由推進賞「報道功労賞」受賞
2021年度環境ジャーナリスト協会レイチル・カーソン環境出版賞

※上映後、監督および中島岳志教授(東工大リベラルアーツ研究院)によるトークイベントを行います(司会:木内久美子同学准教授)
※本作品は日本語で上映します
※質疑応答の際は、日・英の通訳があります

主催：東京工業大学リベラルアーツ研究教育院
問い合わせ先：ilasym@ila.titech.ac.jp